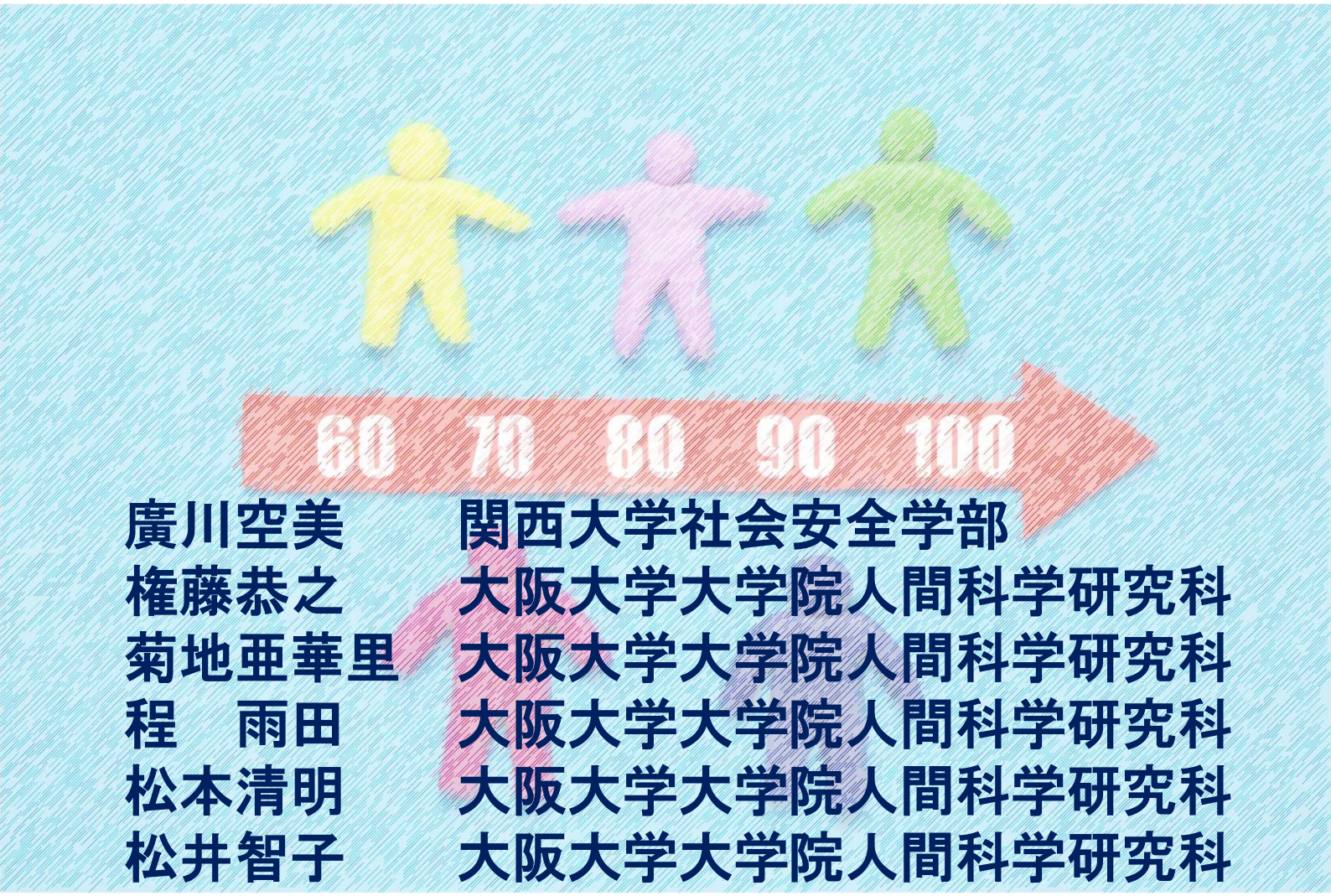
【令和2年度～令和4年度】科学研究補助金

高齢者の幸福感に及ぼす文化的影響



廣川空美　関西大学社会安全学部
権藤恭之　大阪大学大学院人間科学研究科
菊地亜華里　大阪大学大学院人間科学研究科
程　雨田　大阪大学大学院人間科学研究科
松本清明　大阪大学大学院人間科学研究科
松井智子　大阪大学大学院人間科学研究科

2024年3月

はじめに

日本は世界でも有数の超高齢社会を迎えています。内務省(2012)の平成 24 年度版高齢白書における「超高齢化社会の課題」では、高齢者が就労や社会参加を継続したいという意欲を満たすような支援や、高齢者を孤立させないような地域における人とのつながりが挙げられています。超高齢化社会において、高齢者が活躍を続け、心身の健康状態を維持することが求められています。どのような高齢者への対策を講じるかによって、心身の健康や幸福感を高める地域づくりに違いが生じてくると考えられます。

幸福感は人生に対する認知的評価の側面である心理的幸福感(psychological well-being: Diener, 1994)、現在の感情状態の側面である主観的幸福感(subjective well-being: Ryff, 1989)から構成されると考えられています。これらの 2 つの側面は、文化的な影響を受けていることが指摘されています(Diener et al., 2003; Steel et al., 2018)。高齢化社会が進む国際社会において、幸福感に及ぼす文化的影響とはどのようなものであるのかを明らかにし、高齢者の幸福感を醸成するような地域における取り組みを考案できればと考えました。

本研究は令和 2 年度～令和 4 年度 JSPS 科研費(課題番号: 20K03475)の助成を受けて行いました。

1．幸福感と地域差

1．1．アメリカ合衆国 HRS データ

アメリカ合衆国で行われている Health and Retirement Study（HRS）のデータを用いて、幸福感に地域差があるかどうか検証しました。

65 歳以上の高齢者 514 名を分析対象とし、現在の居住地域による抑うつ感(CES-D 得点)の違いと、出身地域による抑うつ感の違いを比較しました。居住地域は北西部（Northeast）、中央（Central）、南部（South）、西部（Western）に分類し、出身地域にはこれらに アメリカ以外（Not US）を加えて比較しました。

結果として、居住地域による違いも、出身地域による違いも見られませんでした。しかし、最も抑うつ感が高かった South の出身者では、身体疾患の数が多く、学歴が低く、収入が少ない人の割合が大きいことが示されました。出身地域で受けた「教育」によって、その後の「収入」や「健康状態」に影響し、高齢期の抑うつ感にも影響を及ぼしている可能性が示唆されました。

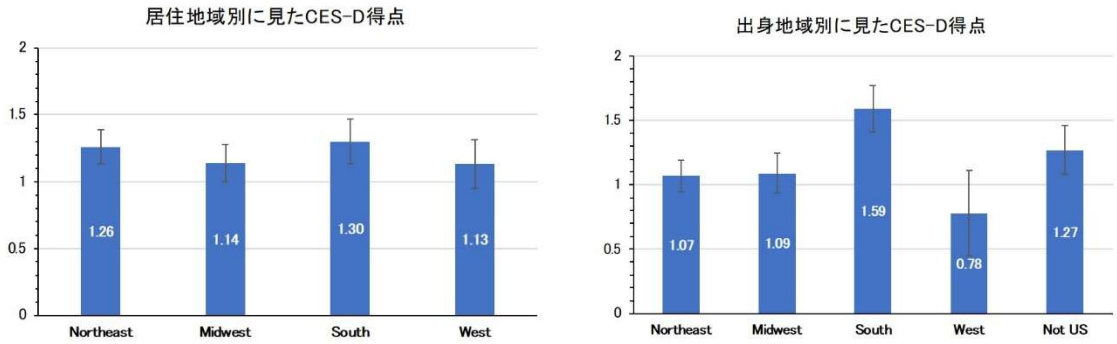


図 1　居住地域、出身地域と抑うつ感　National Institute on Aging からの資金提供を受けて、ミシガン大学によって作成および配布された（許可番号 NIA U01AG009740）。ミシガン州アナーバー（2016 年）

1．2．日本人対象調査の結果

2023 年 11 月オンライン調査において、全国の 20 歳～79 歳日本人男女 1141 名を対象に、居住地域、出身地域、移住の有無と幸福感との関連について調査を行いました。幸福感の指標は抑うつ感(K6 得点)、肯定的感情、否定的感情、人生満足度を測定しました。

居住地域による違いは、肯定的感情のみ、北海道・東北地方と九州・沖縄地方に統計的に有意な差がみられました。肯定的感情は九州・沖縄地方が高く、北海道・東北地方が低いことが示されました。しかし、抑うつ感や否定的感情、人生満足度には違いがなく、成育地域や移住の有無による違いも示されませんでした。

「教育」「収入」については出身地域よりも居住地域による違いが顕著にみられ、関東地域において高い「教育」と「年収」が示されました。移住による違いは「教育」にのみ示され、移住した人の方が高い「教育」を受けていたことが分かりました。高い「教育」を得るために移住した人が、その地域で就職をし、定住しているのではないかと思われます。

アメリカ合衆国と日本とでは傾向が違っていますが、幸福感と地域差はあまり関連はなく、「教育」における地域差が重要な要素なのかもしれません。

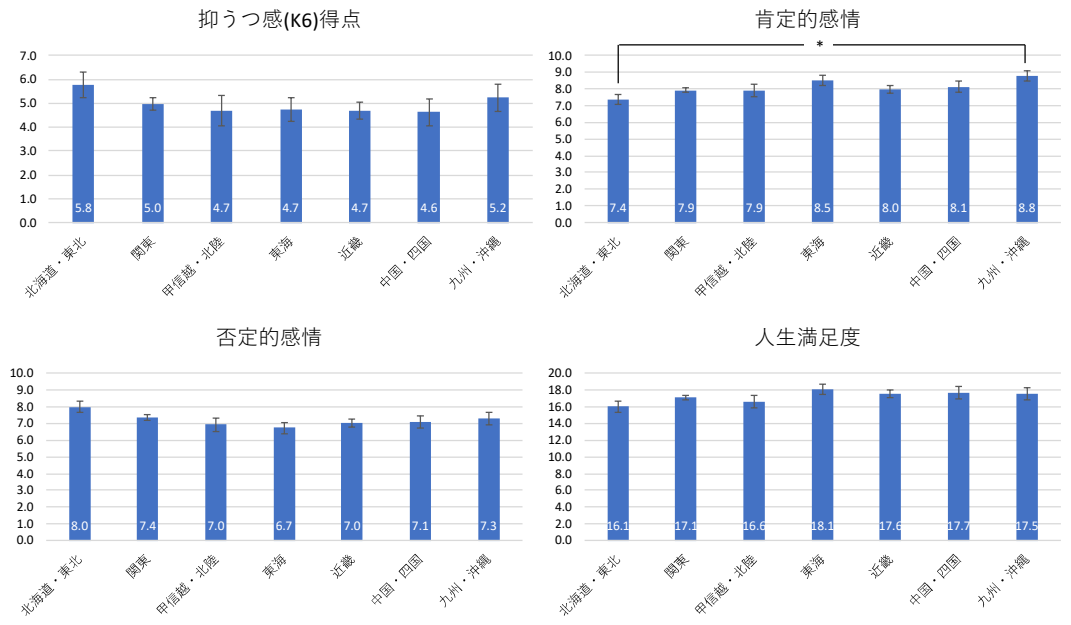


図 2　居住地域による幸福感との関連

2．幸福感と文化的価値観

2．1．ヨーロッパ SHARE データ

ヨーロッパの国際比較調査である Survey of Health, Ageing and Retirement in Europe (SHARE)のデータを用いて幸福感と文化的価値観の関連を検証しました。Hofstede et al. (2010)の権力格差、個人主義、男性性、不確実性の回避、長期主義、快楽主義の 6 つの文化的価値観と、幸福感(CASP-12)のそろっている 25 カ国の 65 歳以上の年齢の 40,430 名(女性 54.6%)のデータを使用しました。

6 つの文化的価値観の中で快楽主義だけが幸福感と有意な関連が示されました。快楽主義は「楽観的」や「人生はコントロールできる」などで構成されており、25 カ国のうち快楽主義が高いのはスウェーデンで、最も低いのはラトビアでした。

ヨーロッパの国々において、年齢が高くなるほど幸福感が下がるのですが、加齢とともに快楽主義の価値観が高くなり、快楽主義が高い国では個人の幸福感も高くなることが示されました。つまり、高齢者が快楽主義的な文化的価値観を持つことで、加齢による幸福感の低下が軽減される可能性があります。

文化的価値観としては、快楽主義が幸福感と関連する要素ではないかと考えられます。

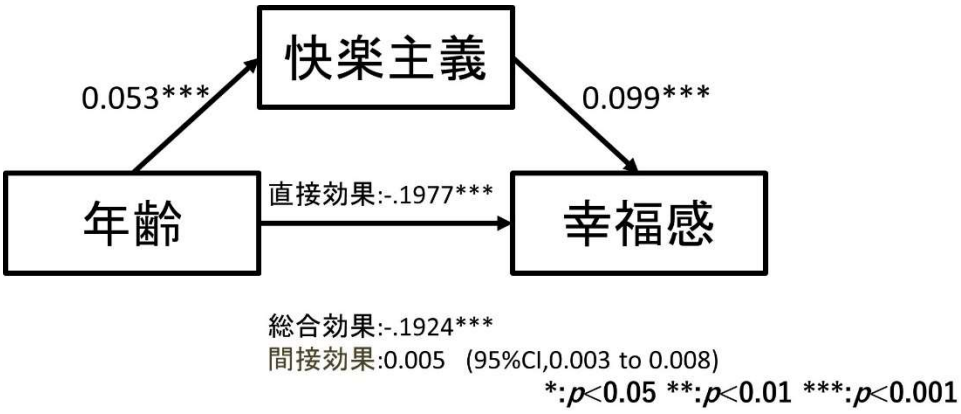


図 3　年齢、文化的価値観と幸福感の関連

2．2．日本人対象調査の結果

2023 年 11 月オンライン調査を用いて、日本人男女 1141 名で年齢、文化的価値観と幸福感の関連について分析を行いました。その結果、日本人データにおいても、快楽主義が幸福感の指標である抑うつ感(K6)、肯定的感情、否定的感情、人生満足度と最も強い関連を示しました。

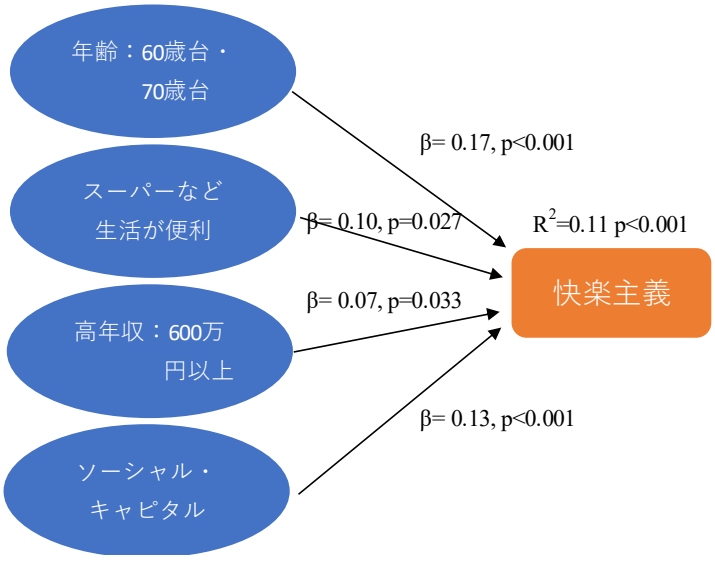
そこで快楽主義の価値観が高い地域の要因を検証しました。

① **年齢：**年齢が高くなるほど快楽主義が高くなることが示されました。この結果はヨーロッパの SHARE データの結果と同じ傾向になります。

② **地域差：**居住地域による快楽主義との関連はありませんでした。

③ **地域の住みやすさ：**居住地域の住みやすさについて、「交通の利便性」「スーパーなど生活が便利」「図書館など施設が豊富」「医療施設が整備」「地域の安全・安心感」「働く場所が豊富」「自然が豊富」を尋ねました。この中で快楽主義と関連が認められたのは「スーパーなど生活が便利」であることでした。

④ **ソーシャル・キャピタル：**地域における人々の信頼関係や結びつきの強さを表す指標として測定しました。快楽主義と強い関連を示したのがこのソーシャル・キャピタルの高さでした。地域の人々との信頼関係や地域への愛着がある人ほど快楽主義の価値観も高いことが示されました。



⑤ **経済的指標：**年収や学歴、持ち家かどうかといった経済的指標と快楽主義との関連も調べました。年収が高い人ほど快楽主義の価値観も高いことが示されました。

図 4　快楽主義と関連する要因

3．文化的価値観を測る

3．1．不確実性の回避とエイジズム

2022 年にアメリカ合衆国の男女 909 名(年齢: 41.3±15.9、女性: 39.4%)と日本の男女 554 名(年齢: 50.3±16.4、女性: 47.1%)を対象に、Hofstede et al. (2010)の提案した文化的価値観のうち「不確実性の回避」について、両国間で比較可能な尺度を作成しました。不確実性の回避とは、曖昧な状況や未知の状況に脅威を感じ回避しようとすることを指します。不確実性の回避傾向が高い国や地域では、不安を感じやすいことが特徴とされています。また、不確実性の回避傾向が高い国や地域ほど平均寿命が長く、高齢者の人口割合が高く、出生率が低いことが示されています(Hirokawa et al., 2023)。

表 1　日本語版不確実性回避傾向尺度 17 項目

一般的な社会生活上の価値観についてお尋ねします。 次に挙げられている記述について、あなた自身の考えに 最も当てはまるものを１つ選んでください。		全く賛成しない	あまり賛成しない	どちらともいえない	やや賛成する	大いに賛成する
1	人生に絶えずつきまとう不確かなことは、脅威であり、取り除かなければならない	1	2	3	4	5
2	不安を感じている人が多い	1	2	3	4	5
3	危険が予測できないようなあいまいな状況であっても平気である	1	2	3	4	5
4	違うということは危険である	1	2	3	4	5
5	家庭生活に満足している	1	2	3	4	5
6	不幸だと感じている人が多い	1	2	3	4	5
7	健康やお金に関する心配が多い	1	2	3	4	5
8	新しい製品や技術に対してとまどいがある	1	2	3	4	5
9	同じ雇用先に長い期間勤め続けることが好ましい	1	2	3	4	5
10	数多くの細かい法律や暗黙の了解が必要である	1	2	3	4	5
11	政治に興味がない	1	2	3	4	5
12	外国からの移民を受け入れることは反対である	1	2	3	4	5
13	変化することに抵抗を感じる	1	2	3	4	5
14	未知のリスクでも冒すことをいとわない	1	2	3	4	5
15	失敗に対する恐れよりも成功に対する希望の方が大きい	1	2	3	4	5
16	指示に従って、確実に成果が得られる仕事が望ましい	1	2	3	4	5
17	将来に不安がある	1	2	3	4	5

※「一般的不安・心配」: 項目 2, 5, 6, 7, 17、「変化・違いへの不耐性」: 項目 4, 8, 11, 12, 13、「不確実性への不耐性」: 項目 3, 14, 15、「職場・生活に関する価値観」: 項目 1, 9, 10, 16

作成した日本語版尺度は、表 1 の 17 項目です。将来への不安などを含む「一般的不安・心配」5 項目(α= .77)、変化への抵抗などを含む「変化・違いへの不耐性」5 項目(α= .59)、曖昧な状況への不耐性などを含む「不確実性への不耐性」3 項目(α= .64)、雇用先の継続などを含む「職場・生活に関する価値観」4 項目(α= .54)の 4 因子構造が採用されました。つまり、不確実性の回避という文化的価値観は、曖昧な状況や未知の状況に対する不寛容さを表す「変化・違いへの不耐性」「不確実性への不耐性」と、それらが価値観や態度として現れた「一般的不安・心配」「職場・生活に関する価値観」から成ると解釈できます。

不確実性の回避と幸福感の関連について、日本人調査データで検証しました(表 2)。不確実性の回避は、抑うつ感(K6)や否定的感情と正の相関、肯定的感情や人生満足度と負の相関を示しました。特に「一般的不安・心配」の得点が幸福感と比較的強く関連していました。

表 2 不確実性の回避と幸福感の相関分析結果

	抑うつ感 (K6)	肯定的感情	否定的感情	人生満足度
不確実性回避 総得点	.376**	-.351**	.330**	-.427**
Ⅰ 一般的不安・心配	.427**	-.477**	.363**	-.565**
Ⅱ 変化・違いへの不耐性	.226**	-.279**	.163**	-.330**
Ⅲ 不確実性への不耐性	.185**	-.148**	.203**	-.159**
Ⅳ 職場・生活の価値観	.076**	.079**	.062*	.037

※ K6：得点が高いほどうつや不安が強い．肯定的感情：得点が高いほどポジティブ感情が高い．否定的感情：得点が高いほどネガティブ感情が高い．人生満足度：得点が高いほど人生満足度が高い．*p<.05, **p<.01.

また、不確実性の回避は他者への排斥的態度等の様々な要因と関連する重要な文化的価値観である(Hofstede et al., 2010)ことから、高齢者に対する偏見や差別を指すエイジズムとの関連を検討しました。相関分析の結果、特に「変化・違いへの不耐性」の得点がエイジズム得点と有意な正の相関を示しました(表 3)。つまり、現状からの変化や違いに耐えられない人ほど、加齢変化や高齢者集団を否定的に捉えるといえます。

表 3 不確実性の回避とエイジズムの相関分析結果

	エイジズム			
	総得点	Ⅰ 誹謗	Ⅱ 嫌悪・差別	Ⅲ 回避
不確実性の回避 総得点	.188**	.220**	.093*	.188**
Ⅰ 一般的不安・心配	.104*	.159**	.030	.107*
Ⅱ 変化・違いへの不耐性	.283**	.229**	.250**	.219**
Ⅲ 不確実性への不耐性	.045	.005	-.042	.140**
Ⅳ 職場・生活の価値観	.029	.166**	-.046	.020

※ エイジズムは日本語版 Fraboni エイジズム尺度(FSA)短縮版(原田ら, 2004)にて測定. *p<.05, **p<.01.

３．２．快楽主義

日本人を対象としたオンライン調査では、快楽主義の価値観が幸福感を高める要因の 1 つとして抽出されました。

Hofstede et al. (2010)によると、快楽主義の価値観は、「人生のコントロール感」「余暇の時間を大切にする」「友人がいること」といった内容で構成されています。快楽主義の価値観が強い国や地域では、個人の幸福感や well-being に焦点がおかれ、自由であることや個人のコントロール感が大切であるとされています。この Hofstede et al. (2010)の定義に基づき、快楽主義を測定する尺度を作成しました(表 4)。

7 項目のうち「道徳的なルールを守ること」「割り当てられた性役割に合わせること」の 2 項目は、重視するほど快楽主義とは対極になる禁欲主義の価値観が強いことになります。しかし、日本人のデータを分析すると、7 項目すべてが快楽主義としてまとまりました(α= .72)。

本研究において作成した快楽主義の 7 項目では、40 歳台以下の男女と 50 歳台以上の男女では得点に違いがあり、高齢になるほど得点が高くなっていました。その為、快楽主義の高低の基準となる得点は 50 歳台以上の方の方が高くなっています。

この結果は日本人のデータだからなのか、他の国や地域でも同様の結果になるのかは分かりません。今後は他の国や地域においても快楽主義について調査をし、日本人データと比較することが求められます。また、快楽主義の文化的価値観をこの 7 項目で測定できているのかも、さらに検証することも求められます。快楽主義を測定する尺度として妥当性・信頼性を検証することが必要です。

表 4　快楽主義を測定する 7 項目

	全く重要視しない	あまり重要視しない	どちらでもない	やや重要視する	きわめて重要視する
自分の生活は自分のしたいようにできること	1	2	3	4	5
娯楽やレジャーの時間があること	1	2	3	4	5
友だちがいること	1	2	3	4	5
道徳的なルールを守ること	1	2	3	4	5
割り当てられた性役割に合わせること	1	2	3	4	5
いつもニコニコしていること	1	2	3	4	5
自由に意見が言えること	1	2	3	4	5

基準：20歳～49歳　24点以下が「低」25点以上が「高」
　　50歳～79歳　25点以下が「低」26点以上が「高」

3．3．死生観

死や生に対する価値観や考え方は死生観と呼ばれ、心理学をはじめとする様々な分野で研究されています。例えば、死生観と精神的健康の関連については、死生観のうち「解放としての死」が高いと抑うつや不安が高いことが報告されています(安部, 2019)。また、自殺や自殺関連行動と死生観の関連も報告されており(赤澤, 2009; 佐野・加藤, 2013)、自殺を実行に移さない死生観の形成が重要であると考えられています。このように、死生観は健康長寿を実現する上で重要な要素であると言えます。

これまでの研究において、死や生に対する価値観や考え、態度を測定するために複数の尺度が作成されてきました(隈部, 2006; 平井ら, 2000; 丹下, 1999)。その内容を精査すると、「価値観」や「態度」などが明確に区別されていない傾向がありました。そこで、特に死や生に対する「価値観」に焦点を当てた死生観尺度(7 因子)の開発に取り組み、日本人男女 1141 名を対象としたオンライン調査を行いました。そして、死生観への回答に同意し、かつ回答に不備のなかった 957 名を対象に分析しました。

死生観が抑うつ感(K6)や人生満足度と関連するかについて、年齢や性別、世帯収入を調整した上で重回帰分析を用いて検討しました。その結果、死生観のうち「苦難としての生」「人生に対して死が持つ意味」が抑うつ感(K6)と関連しました(図 5)。人生満足度については、死生観のうち「苦難としての生」「人生に対して死が持つ意味」「存在の永続性に対する信念」が関連しました(図 6)。双方の結果を考慮すると、生きることを苦難として捉える程度が低いことや、死を人生にとって意味あるものとして考える程度が高いことが幸福感を高めることに寄与すると考えられます。

死生観や死に対する態度は、若年期・中年期・高齢期で特徴が異なることが指摘されています(隈部, 2006; 丹下ら, 2013)。今後の研究では、年齢の影響も考慮して検討を進めていく必要があると考えています。

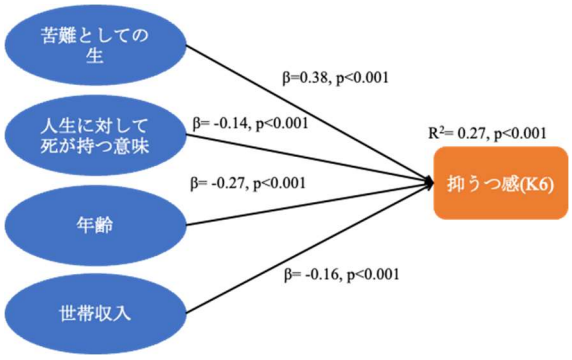


図 5. 死生観と抑うつ感の関連

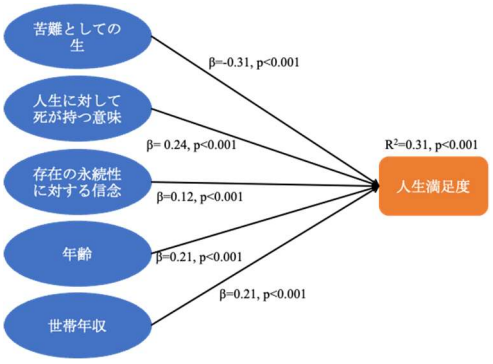


図 6. 死生観と人生満足度の関連

４．幸福感を高める地域づくり

４．１．ソーシャル・キャピタル

加齢とともに幸福感が低くなり、逆に抑うつ感が高くなるのですが、快楽主義の価値観が高い地域においては、高齢になっても幸福感が維持される可能性が示唆されました。快楽主義の価値観が高い地域では、自分の生活が自由にできて、コントロール感があること、また、娯楽やレジャーを楽しむことができること、友だちがいることなどが重要です。

友だちがいることで、高齢になっても娯楽やレジャーを楽しむ時間が持てることにもつながるでしょう。地域の中での信頼関係を築くことができることが重要になります。地域の中での信頼関係や人と人とのつながりを示すものにソーシャル・キャピタル(Social Capital)という概念があります。ソーシャル・キャピタルは、日本語では社会関係資本と訳されています。Putnam (1993)は、ソーシャル・キャピタルを「共通の利益のために協調や協力を促進する、社会的ネットーワーク、規範、信頼といった社会組織の特徴」と定義しています。

ソーシャル・キャピタルは様々な学問分野で共通の概念を表すものとして学際的な研究が多くなされおり、近年では公衆衛生学や社会学での研究が盛んに行われています。例えば、ソーシャル・キャピタルと死亡リスクや要介護認定リスクとの関連(Aida et al., 2011; Kondo et al., 2012)があることや、うつや精神的健康などの心理的な状態にも関連があることがわかっています。このような研究成果を踏まえて、健康日本21(第二次)では、高齢者の健康予防や幸福感を高めるために、ソーシャル・キャピタルの活用が注目されています。

４．２．祭りに参加する

ソーシャル・キャピタルは個人や地域によって差があるといわれています。なぜ差が生まれるのか、つまりソーシャル・キャピタルを醸成する要因がわかれば、ソーシャル・キャピタルを高める活動を通して健康予防や幸福感を高めることにつながると考えられています。

その答えの一つとして、祭りが注目されています。山田 (2016) は、文化資本の継承という観点から、ソーシャル・キャピタルを醸成する要因の一つが、地域の祭りであると指摘しています。また稲場 (2016)は、祭りにより同年代の者たちの結束を高める結束型ソーシャル・キャピタルが醸成され、世代間でみれば橋渡し型ソーシャル・キャピタルが醸成されるとしています。つまり、祭りはソーシャル・キャピタルの醸成器であると考えられています。

日本人男女 1141 名を対象としたオンライン調査において、ソーシャル・キャピタルと祭りへの参加、人生満足度の関連について分析を行いました。その結果から、地域の祭りへの参加頻度が多いとソーシャル・キャピタルは高く (r=.44 p<.001)、また人生満足度も高い(r=.28 p<.001)ということがわかりました。さらに、主観的健康感や世帯収入を調整した上で、ソーシャル・キャピタルと祭りへの参加頻度が人生満足度と関連しているのか、重回帰分析を用いて検証しました。その結果、ソーシャル・キャピタルが高いと人生満足度は高く、祭りに参加している人が参加していない人よりも人生満足度が高いということがわかりました(図 7)。

もちろん、これは一時点での横断的な分析の結果なので、因果関係を示すものではありません。また、これらの分析は個人レベルでのソーシャル・キャピタルの程度を調べた結果なので、地域単位でのソーシャル・キャピタルが個人に影響を与えているのか検証することも必要です。今後は、因果関係を調べるために縦断的なデータを用いて、祭りに参加することがソーシャル・キャピタルを高め、幸福感を高くするのか、個人レベルでの検証に加えて、地域レベルでの検証も必要だと考えています。

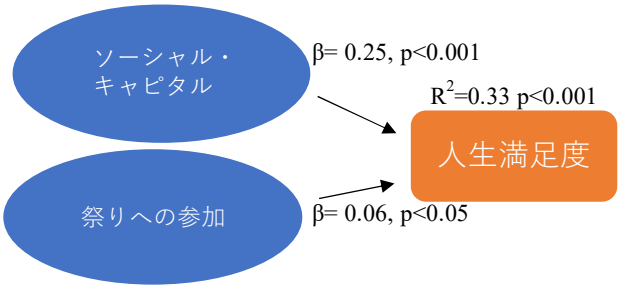


図 7　ソーシャル・キャピタル、祭りへの参加と人生満足度

おわりに

本研究の結果から、『*快楽主義*』という文化的価値観が幸福感を醸成する地域づくりのキーワードとして出てきました。まず、『*快楽主義*』とは何でしょうか。『*快楽主義*』を構成する中心的な要素は、様々な状況を自身で**コントロール可能性**を重視することだと考えられます。今回、日本人を対象にした調査では、道徳的なルールを守ること、割り当てられた性役割に合わせることといった一見自身のコントロールとは関連しないような項目が入っています。これらの項目は、近年多様な価値観が広がる中で、古くからの強固な社会規範に合わせることと考えれば、コントロールが必要なことではないかと考えられます。かといって、自分勝手に行動するということでもありません。それはもう一つの重要な構成要素に、友人や対人場面において笑顔でいられるといった**社会関係**に関連する内容が含まれていることからわかります。つまり、『*快楽主義*』は人生において**自身で状況をコントロールできること**、**よい対人関係を持つこと**を重要視しているかことを評価する指標といえるでしょう。

また本研究では、同時に経済状況、ソーシャル・キャピタル、地域の住みやすさといった、社会環境要因さらには、不確実性の回避や死生観など、文化比較が可能な要因も幸福感に影響することが示されました。『*快楽主義*』はこれらのとの関係はどうなのでしょうか。**地域の物理的状況、地域の人間関係などを重要視**していることが『*快楽主義*』の高い人の特徴なので、それらを**より良い方向に向けようと努力**もするでしょう。また、そもそもよい環境で生活していると**それらの重要性を実感**していと考えられます。『*快楽主義*』は、幸福感が高まる状況を醸成する個人の資質を評価しているのかもしれません。不確実性の回避や死生観についても、同様に自身のコントロール感や対人関係によって変化する可能性もあります。『*快楽主義*』の高さと、両者の関係も検討しなければなりません。

このように『*快楽主義*』の文化的価値観についての研究はまだ始まったばかりで、今後さらに研究が進み、私たちの心身の健康にどのような影響を及ぼしているのか、明らかにしていく必要があります。

引用文献

安部幸志（2019）簡易死生観尺度（QIDA-8）の作成と信頼性・妥当性の検証．鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集, 86, 1-7.

Aida J, Kondo K, Hirai H, Subramanian SV, Murata C, Kondo N, Osaka K. (2011) Assessing the association between all-cause mortality and multiple aspects of individual social capital among the older Japanese. BMC Public Health 11.

赤澤正人（2009）若年者の自殺関連行動と死生観に関する研究．「日本死の臨床研究会平成 21 年度研究助成報告書」 https://www.jard-info.org/wp/wp-content/uploads/2019/07/akazawa.pdf (2024.2.29)

Diener E (1994) Assessing subjective well-being: Progress and opportunities. Social Indicators Research, 31(2), 103–157.

原田謙，杉澤秀博，杉原陽子，山田嘉子，柴田博（2004）日本語版 Fraboni エイジズム尺度(FSA)短縮版の作成-都市部の若年男性におけるエイジズムの測定-．老年社会科学 26 (3) 308-319.

平井啓，坂口幸弘，安部幸志，森川優子，柏木哲夫（2000）死生観に関する研究――死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証――． 死の臨床, 23（1）, 71–76.

Hirokawa K, Kasuga A, Gondo Y, Honjo K, Taras V (2023) Hofstede's Cultural Values and Birth Rate and Longevity: A National-Level Analysis. Journal of Adult Development. DOI: 10.1007/s10804-023-09457-4

Hofstede G, Hofstede GJ, Minkov M (2010) Cultures and Organizations: Software of the Mind: Intercultural Cooperation and Its Importance for Survival. 3rd Edition. USA: McGraw-Hill.

稲葉陽二（2016）都市祭礼とソーシャルキャピタル． 山田浩之(編著)．「年祭礼文化の継承と変容を考える」 ミネルヴァ書房, pp. 36-38.

Kondo N, Suzuki K, Minai J, Yamagata Z. (2012) Positive and negative effects of finance-based social capital on incident functional disability and mortality: an 8-year prospective study of elderly Japanese. Journal of Epidemiology, 22, 543–550.

隈部知更（2006）日本人の死生観に関する心理学的基礎研究――死への態度に影響を及ぼす 4 要因についての分析――．　健康心理学研究, 19（1）, 10–24.

内務省（2012）平成 24 年度版高齢白書.「超高齢化社会の課題」 https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2012/zenbun/index.html (2024.2.6)

Ryff CD (1989) Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being. Journal of Personality and Social Psychology, 57(6), 1069–1081.

佐野和規，加藤哲文（2013）青年期の自傷行為とスピリチュアリティ・死生観との関係について—定時制高校在籍者を対象とする分析—．学校メンタルヘルス, 16(2), 140-151.

Steel P, Taras V, Uggerslev K, Bosco F (2018) The happy culture: A theoretical, meta-analytic, and empirical review of the relationship between culture and wealth and subjective well-being. Personality and Social Psychology Review, 22(2), 128–169.

丹下智香子（1999）青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討．心理学研究, 70（4）, 327–332.

丹下智香子，西田裕紀子，富田真紀子，安藤富士子，下方浩史（2013）中高年者に適用可能な死に対する態度尺度（ATDS-A）の構成および信頼性・妥当性の検討．　日本老年医学会雑誌, 50（1）, 88–95.

山田浩之(編著) (2016) 「年祭礼文化の継承と変容を考える」 ミネルヴァ書房.

データの出典

Ann Arbor, MI, (2016) Health and Retirement Study, (RAND HRS Data Products) public use dataset. Produced and distributed by the University of Michigan with funding from the National Institute on Aging (grant number NIA U01AG009740).

Börsch-Supan, A. (2022) Survey of Health, Ageing and Retirement in Europe (SHARE) Wave 7. Release version: 8.0.0. SHARE-ERIC. Data set. DOI: 10.6103/SHARE.w7.800.